



立花宗茂と閻千代をテーマにしたラジオ番組がギャラクシー賞を受賞 大河ドラマ実現のため2人の魅力を全国に伝える



▲RKBラジオのスタジオで番組に出演した金子市長たち
▶8月3日、東京で行われたギャラクシー賞優秀賞を受賞する加来耕三さん



2月11日に放送されたRKBラジオ番組「加来耕三が柳川で大河ドラマをつくってみた超拡大！放送尺22倍SP」がギャラクシー賞のラジオ部門優秀賞を受賞しました。同賞は、NPO法人放送批評懇談会が、全国で放送されたラジオやテレビなどの中から、優れた作品を表彰するもの。応募総数88作品のうち、大賞に次ぐ優秀賞3作品の1つに選ばれました。受賞した番組は昨年10月から今年3月末まで放送された、戦国武将の立花宗茂と妻の閻千代を主人公にしたRKBラジオ「加来耕三が柳川で大河ドラマをつくってみた」の特別版。柳川観光大使を務める歴史家の加来耕三さんが、宗茂の生涯を現代風にアレンジしたラジオドラマを軸に、解説やトークが繰り広げられる5時間30分番組です。詳しくは、下のQRコードから公式サイトをご覧ください。

【問】市観光課観光推進係 ☎77・8563



加来耕三さんの喜びの声

この度は、RKB毎日放送の企画力・制作力・営業力に支えられ、素晴らしい賞をいただいた番組に、参加させていただきました。賞の反響は大きく、柳川市ゆかりの戦国武将・立花宗茂が生涯無敗の人であり、妻・閻千代は「おんな城主」として魅力に溢れ、夫婦の思い出の地・柳川に20年かけて宗茂が戻ってきた点が、大きな感動を呼びました。新型コロナ禍の日本において、立花宗茂以上に学べる日本史上の人物はいないのでないでしょうか。柳川の観光資源としても、最高のものだと思います。



▲ギャラクシー賞の記念品を手にする加来さん



【写真4】一家の集合写真。右に座っているのが庸。大正後期撮影
【写真3】庸（右）と娘たち。明治末～大正初期撮影
【写真2】庸（右）の婚礼写真。明治37～38年撮影
【写真1】明治33～34年撮影

明治18（1885）年、陸軍医の渡辺鼎は「膏油（ハードワックス）で固めて何日も洗わず、自分で結えない女性の日本髪は不衛生かつ不経済だ」として、これらを解消する「束髪」を提唱しました。その後、「束髪図解」「日本西洋束髪独結び」などのヘアカタログによって、さまざまな新しい髪型が世に出ました。今回は、柳川の1人の女性にスポットを当てて、近代女性のヘアスタイルに注目していきます。

紹介する人物は十時庸。柳河藩士十時一郎の次女として明治18年に生まれました。

【写真1】は、庸が16歳のときに細工町の野片写真館で撮影したもの。前髪と鬢（側頭部の髪）をまとめて少しふくらませた形は、教育者で歌人の下田歌子から始まったスタイルで、明治33年頃から流行りました。

【写真2】は、鬢（頭頂部にまとめた髪）が見えませんが、おそらく島田鬢か丸鬢に結った婚礼の写真です。隣の男性は、夫で海軍技術士官の石川登喜治（矢留出身）。明治37から38年に、佐世保市で撮影したものとされます。婚礼の際に

流行りのヘアスタイル

柳川市史編さん係 梅本 真央

は、黒の引振袖を着て、初日は島田鬢、2日目以降は丸鬢に結うのが旧柳河藩士の女性のならわし。写真では、流行を取り入れ、前髪を通常よりふくらませています。

【写真3】は明治末から大正初期に呉市で撮影したものとされます。大きく張り出した前髪は庇髪スタイル。明治37年に女優川上貞奴が始めたもので、大正中期まで流行の中心でした。娘たちは後ろ髪を垂らした束髪くずしに、大きなリボンをつけています。リボン飾りは明治41年頃から世界的に流行しました。

【写真4】は、大正後期に呉市で撮影したのと思われるものです。娘たちは七三分けにしているのが分かります。女性の七分三分けは、大正後期に資生堂の三須裕が考案しました。庸は前髪をふくらませず、鬢も結っていません。そのかわり、この時代にはコテ（ヘアアイロン）やドライヤーが登場し、庸もカールやウェーブを施すようになりました。

こうした写真からは、トレンドをつかみ、おしゃれを楽しむ女性の姿がみえてきます。

市史編集委員会では、数年後に写真を中心とした本を刊行する予定です。現在さまざまな写真や絵はがきなどを集めています。隔月1日号に、同委員会で集めた写真を紹介します。

【問】市生涯学習課市史編さん係 ☎72・1275